

Role Model集

未来につながる
公衆衛生医師という
キャリア

発行 2017年3月
平成28年度 厚生労働科学研究費補助金
公衆衛生医師確保のための連携の在り方に関する研究班
問合先 〒617-0006 京都府向日市上植野町馬立8
京都府乙訓保健所 企画調整室
TEL 075-933-1151
Mail yamashin-ho-oto-kikaku@pref.kyoto.lg.jp



目次

03 はじめに

04 京都府立医科大学 医療センターについて

京都府立医科大学 医療センター 所長 細井 創

06 応援メッセージ

全国保健所長会 会長 宇田 英典

京都府健康福祉部 保健医療対策監 渡邊 能行

08 ロールモデル

はじめに

行政・公衆衛生医師は地域医療と連携し、地域全体を把握し人々の健康と安全を守り動かしていく、各地域・自治体において欠かせないとても大切な役割を担っています。しかしながら、医師の臨床志向の強い現状では、卒後研修等終了後、ダイレクトに内容をとらえにくい公衆衛生・地域保健を選択する医師はごく一部に限られています。また、公衆衛生は縁遠くかつキャリアパスの広がりも感じにくいイメージが定着しています。

京都府では、京都府立医科大学 医療センターシステムにおいて、自治体と大学の連携により、公衆衛生に従事する医師の確保が行われてきました。本研究においては、近年、保健所などの京都府行政機関において行政・公衆衛生業務に従事した医師の方々を対象とした調査を実施しました。臨床医であった多くの医師が、それまでの経験も活かし、やりがいを持って、地域において公衆衛生・地域保健に取り組んでいることが明らかとなりました。また、公衆衛生への従事が終了した場合も「公衆衛生・地域保健での経験とキャリアが、今後の自身の臨床や研究に役立つ」との回答が多く寄せられました。

公衆衛生への従事が限定的であったとしても、公衆衛生で習得した知識やスキルを臨床・研究等の分野に広く還元・活用していくこと、そして、医育機関にも公衆衛生の経験のある人材が増加することにより、連携の強化、公衆衛生教育の充実及び若手人材育成にもつながります。医育機関である大学において、本医療センターモデルのような公衆衛生・地域保健が広く可逆的選択肢となるシステムが確立されることにより、公衆衛生と臨床分野の双方向性でのキャリアパスが可能となることが期待されます。

公衆衛生医師育成においては、全国において自治体と医育機関である大学の連携が進む機会となる社会医学系専門医制度がスタートしました。本冊子により、公衆衛生・地域保健に従事した医師の生の声から、その魅力と多様性を知っていただき、キャリアの中で公衆衛生・地域保健を経験される医師が増えていくことを祈念しております。

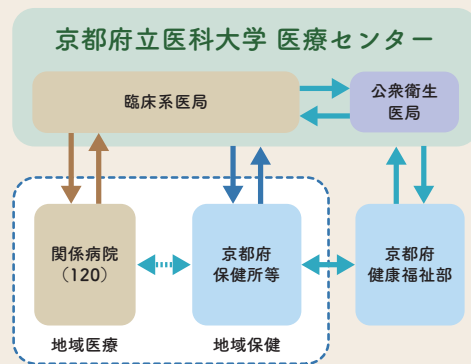
平成28年度 厚生労働科学研究費補助金

公衆衛生医師確保のための連携の在り方に関する研究班

研究代表者 三沢 あき子

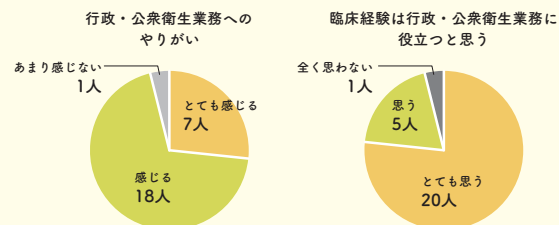
京都市立医科大学 医療センターについて

京都市立医科大学 医療センターは、京都府の医療機関、保健所などの行政機関に継続的に京都市立大学から医師を派遣する機関として、昭和46年に本学の附属機関として設置されました。医療保健行政などの分野で、医療に関する高度な知識や技能を地域に還元するための使命を果たし、地域連携を深めています。派遣された医師は大学教員としての立場を併せ持ち、各地域の公衆衛生分野において活躍しており、本システムは京都府の公衆衛生医師確保において大きな役割を果たしています。



京都市立医科大学 医療センター調査結果

本研究により、平成23年度以降に京都府行政機関に従事した医師26名のうち25名（96%）が、行政・公衆衛生業務に関してやりがいを「とても感じる」「感じる」、臨床経験は行政・公衆衛生業務に役立つと「とても思う」「思う」と回答しました。このことから、医療センターのような公衆衛生・地域保健従事が可逆的選択肢となるシステムが存在し、公衆衛生と臨床分野での双方向性で柔軟なキャリアパスが普及・拡大することにより、公衆衛生医師の確保・育成につながる可能性が示されました。



京都市立医科大学 医療センター 所長



細井 創

京都府の地域医療及び地域保健を長年にわたり担ってきた京都市立医大 医療センターの所長を平成27年4月より拝命しています。就任時には、各保健所を表敬訪問し、各保健所長と地域課題について協議をさせていただきました。京都府においても公衆衛生医師の育成と確保に関しては課題がありますが、本研究により、本学医療センターからの派遣医師にとって公衆衛生・地域保健の経験が、医師としてのキャリアにおいて重要な役割を果たしていることが明らかとなりました。

医療センター人事においては、行政・公衆衛生の道を突き進み生涯の仕事として極める医師もあれば、大学や関係病院での臨床に戻るといった医師の循環もあり、いずれも互いの立場を理解でき、顔の見える関係で良好な連携ができ、よりよい地域医療・地域保健につながるというメリットを実感しています。

このたび、本学医療センター人事をきっかけとして、京都府内の地域の現場に従事した医師からの地域保健のやりがい・魅力と経験を生の声としてロールモデル集としてまとめました。本冊子により、全国において各自治体と医育機関である大学の連携が進み、医師の皆さんには地域保健・公衆衛生に興味を持っていただき、キャリアの可能性を広げる一助となりましたら幸いです。

公衆衛生的スキルの臨床・研究への還元
公衆衛生教育の充実・人材育成



キャリアパスとしての
公衆衛生の選択

臨床経験の地域保健への活用
公衆衛生医師人材の確保



◎応援メッセージ 1

公衆衛生医師と多様なロールモデル

全国保健所長会 会長

宇田 英典



公衆衛生活動は、全ての人の健康水準の維持・向上を図り、社会に安全と安心を与える社会基盤です。時代とともに変化する公衆衛生上のニーズや社会・生活環境に対応していくためには、地域における公衆衛生の第一線機関として、保健所が役割を果たしていくことが重要です。魅力ある職場環境、充実感のある業務、ワークライフバランスを考慮した勤務形態、多様なキャリアパスの提供等、これからの公衆衛生を支える若手医師の確保と育成に対して、私たちが積極的に役割を果たしていく必要があります。また、若手だけではなく、現在、公衆衛生に従事している私たち自身も時代の求めに応じて、質の高い公衆衛生を実践していくことが求められています。

現在、全国保健所長会では12の学会・団体が構成される一般社団法人社会医学系専門医協会の一員として、社会医学系専門医制度の構築に向けて準備をすすめています。社会医学系専門医は個人へのアプローチにとどまらず、多様な集団、環境、社会システムへのアプローチを中心として、人々の健康の保持・増進、傷病の予防、リスク管理や社会制度運用に関してリーダーシップを発揮することを目的としています。現在、研修プログラムや指導医・専門医の認定作業が進められていますが、これまで認定された研修プログラムは、基幹施設、研修連携施設に自治体、大学、研究機関、産業保健施設が地域の特性を反映される形でバランス良く研修プログラムが提供されるものになっています。

全国保健所長会は、社会医学系専門医制度を通じて、これまで以上に整った関係機関との連携体制のもとに、公衆衛生医師の確保と育成の充実を目的として様々な取り組みを行っています。ぜひ、全国保健所長会のホームページ (<http://www.phcd.jp/>) をご覧ください。

Profile

- 1978年 自治医科大学医学部卒業
- 1978年 鹿児島大学第2外科で臨床研修(県衛生部)
- 1980年 県立北薩病院、国立南中病院、甕島、奄美大島で外科・離島医療
- 1988年 国立公衆衛生院専門課程
- 1989年 鹿児島県加治木保健所等県内の保健所に所長として勤務
(うち鹿児島県保健環境部保健予防課長として7年勤務)
- 2012年 鹿児島県鹿児島地域振興局保健福祉環境部長(兼)伊集院保健所長
- 2014年 全国保健所長会会長

◎応援メッセージ 2

いろいろな医師がいて、行政にも医師がいることが豊かな社会を創造する

京都府健康福祉部 保健医療対策監

渡邊 能行



現在、私は京都府健康福祉部保健医療対策監を本務としながら京都府立医科大学の教員も併任しています。これは、昭和40年代以来継続して京都府立医科大学が持っている特殊なシステムです。医育機関における教員として、教育・研究・医療という高度専門職業人としての役割を担いながら、医学の社会的適応を行政における公務員として具現化させることにも関わることができるものです。

病気の発症機序や蔓延の誘因を科学として専らに究めてきた医師だからこそできることが健康政策の中には山ほどあります。もちろん、医師という高度専門職業人には人々の思いを科学し、人間という複雑な存在を深く洞察することも必要です。

自らが、大学人と行政官との間をいわば回転ドアを回って行き来してきたように生きてきたことは何ものにも代え難いものでしたし、大多数の医師が臨床医として終始する医療界において少しは貢献できたのではないかと自負しております。

いろいろな医師がいて、行政にも医師がいることが豊かな社会を創造し、このことに自らの人生を賭けることは本当にやりがいのあることと確信しております。

Profile

- 1978年 京都府立医科大学医学部卒業
- 1978年 一般病院で内科医、消化器内科医として勤務
- 1982年 京都府立医科大学大学院医学研究科(社会医学系)入学
- 1986年 京都府園部保健所長、京都府立医科大学公衆衛生学教室助手併任
- 1989年 京都府立医科大学公衆衛生学教室学内講師、講師、助教授を経て
- 1998年 京都府立医科大学系老化研究センター社会医学部門教授
- 2003年 京都府立医科大学大学院医学研究科地域保健医療疫学教授
- 2007年 京都府中丹東保健所長を併任
- 2009年 京都府山城南保健所長を兼務
- 2015年 京都府立医科大学副学長
- 2016年 京都府健康福祉部保健医療対策監、
京都府立医科大学副学長・地域保健医療福祉行政システム学教授を併任

保健所という公衆衛生の第一線の現場での経験は、 今も大きな財産です。



Profile

- 1981年 京都府立医科大学 卒業
- 1981年 京都市立病院 内科 研修医
- 1983年 第一子誕生
- 1984年 京都府立医科大学 公衆衛生学教室 助手
- 1988年 第二子誕生
- 1993年 医学博士取得
- 1996年 **京都府園部保健所** 所長
(京都府立医科大学 公衆衛生学教室 学内講師併任)
- 1999年 京都府立大学 人間環境学部 食保健学科 教授
- 2008年 ~現職

東 あかね

●京都府立大学 大学院
生命環境科学研究科 教授

京都市立病院内科研修医として3年間勤務した後、大学において公衆衛生の教育・研究に従事。高血圧予防に関する疫学研究で医学博士を取得し、その後3年間は、保健所長として公衆衛生の第一線の現場を経験。現在は、管理栄養士養成課程において教育と研究に携わる。専門分野は予防医学、公衆栄養学「食を通じた生活習慣病の一次予防に関する研究」

行政・公衆衛生分野に進んだときの理由

学生時代、公衆衛生学の教授を尊敬していたこと、4回生で婚約したため進路決定に際し、仕事と家庭の両立を優先させたこと、さらに内科研修医時代に、手遅れで受診する人が多く、疾病予防の重要性を痛切に感じて、迷うことなく公衆衛生分野に進みました。所属していた公衆衛生学教室では、学位取得後に保健所長として勤務することになっており、保健所長として赴任しました。

保健所で取り組んだこと

結核の集団発生、病原性大腸菌による食中毒、赤痢の集団発生への対応など、感染症対策に医師資格をもつ保健所長として、医療機関と連携し、専門的かつ的確に対応することを心がけました。また、精神疾患や難病患者の支援として、職員の家庭訪問への同行、作業所の見学、患者家族会への参加などを積極的に行い、生活者の実態把握に努めました。

食生活からの生活習慣病の予防という専門性を活かし、地域住民の食事調査、尿中塩分調査などを行い、それに基づく健康教育活動を行いました。

保健所・公衆衛生医師のやりがいと魅力

診療所や病院を受診する患者さんを待つのではなく、地域で生活する住民さんの声を直接聞き、心身の健康と食の実態を把握し、保健師、管理栄養士、精神保健福祉士、放射線技師、獣医師等の専門職とともに、チームとして生活全体を支援する保健活動に、大きなやりがいを感じました。

現在・今後のビジョンとライフワーク

人々が平和な社会で、健康で長生きをして、幸せな人生を送ることができることを願って、現在は、疾病予防と健康増進の担い手となる管理栄養士の養成に携わっています。また、教育・研究者の育成も行っています。これらの研究者が教育・研究の場で育っていくことを願っています。

保健所勤務時代に築いた人間関係は大切な財産で、現在も地域とは交流があり、その地域をフィールドとして循環器疾患・腎臓病予防の研究を行っています。定年退職までに、この研究をまとめて教育・研究者としての集大成をしたいと思っています。

後輩へのメッセージ

地域社会全体を健康な社会にすることをめざす公衆衛生は、これからの少子高齢社会において重要な役割を果たします。医師の仕事は、さまざまな困難を伴いますが、明るく、頭を使って、諦めないで、仕事を続け、わが国と国際社会の公衆衛生に貢献してください。

関係者皆と共に情熱を持って取り組んでいくことに、
とてもやりがいを感じました。



Role Model

2

Mariko
Yuge

弓削 マリ子

●花ノ木児童発達支援センターセンター長

保健所勤務時代から始めた地域での調査研究により1985年、医学博士を取得。その後、臨床・研究を経て保健所長となり地域を動かし多くのものを残し、定年まで保健所長を全う。

Profile

- 1972年 関西医科大学卒業
- 1972年 京都市立病院 小児科 研修医
- 1974年 第一子誕生
- 1976年 京都府周山保健所 技師
- 1982年 聖ヨゼフ整肢園
(現 聖ヨゼフ医療福祉センター)小児科
- 1991年 滋賀県立短期大学看護部
(現 滋賀県立大学人間看護学部)教授
- 1999年 京都府園部保健所 所長(京都府立医科大学
公衆衛生学教室 講師併任)
- 2004年 京都府中丹西保健所 所長(同上)
- 2008年 京都府中丹東保健所 所長(同上)
- 2013年 京都府定年退職
- 2013年 花ノ木医療福祉センター 小児科
- 2014年 ~現職

行政・公衆衛生分野に進んだときの理由

第一子出産後、実家で進路について悩んでいました。京都市立病院で同期の研修医だった内科医が周山保健所の健診を手伝っており、彼の友人である同保健所の所長が小児科医を探しておられ、二人で実家へこられて保健所にお誘いいただきました。この保健所が実家から近かったこともあり、勤務することにしました(当時は、展望も夢もありませんでした…)

保健所で取り組んだこと

周山保健所は小規模の保健所で、アットホームな雰囲気の中で職員の方々から地域保健の基礎を教えてもらいました。田舎にもかかわらず肥満児が増えていたため、保健所栄養士と小学校・教育委員会等に相談し肥満児キャンプを実施しました。また、保健所長や職員の方々の絶大なご理解・ご協力のもと、子どもの発達と育児環境の関連を知る目的で、4年間の家庭訪問による縦断的調査を行い、1985年に医学博士を取得することができました。この貴重な経験が、保健所医師・小児科医としての大きな力になりました。園部保健所では結核対策、SARS騒動対策、高病原性鳥インフルエンザ対策、学校保健との連携による思春期保健対策、中丹西保健所では台風災害対応と発達障害児支援体制整備(年中児発達サポート事業の前身)、中丹東保健所では新型インフルエンザ対策、保健師等と協働した「ほめかた絵本」の作成・出版、関係機関と連携したペアレントトレーニング・ソーシャルスキルトレーニングの普及など、職員で力を合わせて頑張りました。

保健所・公衆衛生医師のやりがいと魅力

多職種の方々と協力して課題を共有し、PDCA(plan-do-check-act)サイクルを進められること。発達障害児支援体制整備では、関係者が情熱を持って早期発見・事後支援・環境整備を一貫して企画立案実践でき、大変やりがいを感じました。

現在・今後のビジョンとライフワーク

定年退職後、現在は、花ノ木医療福祉センターで、発達外来や療育支援を行っています。もう、いい年なのですが、ペアレントトレーニング・ティーチャートレーニング・ソーシャルスキルトレーニングの考え方を一般の育児や日常保育にも普及できると思いなあとと思っています。

後輩へのメッセージ

ある程度臨床の力を身につけたうえで、公衆衛生で活躍されることは、その後、臨床に戻ったとしても必ず役に立ちますよ。

創造的な地域づくりに関わることは、 臨床医では得られないかけがえのない経験でした。



高木 智久

- 京都市立医科大学附属北部医療センター 消化器内科 医長
- 京都市立医科大学 消化器内科 准教授併任

消化器内科臨床医として、消化管難病である炎症性腸疾患を専門領域として診療しており、併せてその病態解明、新規治療法の探索を課題として基礎・臨床研究も行っている。

Profile

- 1994年 京都市立医科大学 卒業
- 1994年 京都市立医科大学附属病院 第一内科 研修医
- 1996年 関係病院 内科
- 1997年 第一子誕生
- 1999年 第二子誕生
- 2004年 医学博士取得
- 2005年 京都市立医科大学 生体安全医学講座 助手
- 2007年 京都市立医科大学 生体安全医学講座 講師
- 2008年 京都市立与謝の海病院 消化器内科 医長
- 2008年 京都市健康福祉部 福祉援護課 副課長・医務主幹
- 2008年 京都府給与厚生課 総括産業医
- 2013年 京都市丹後保健所 所長 (京都市立医科大学 消化器内科 准教授併任)
- 2015年 ~現職

行政・公衆衛生分野に進んだときの理由

2008年、当時の与謝の海病院(現京都市立医科大学附属北部医療センター)に異動後に長女に長期の入院加療が必要となり、所属教室の配慮で異動を調整いただきました。行政・公衆衛生分野を希望したわけではありませんでしたが、本庁の福祉援護課と総括産業医を経て、丹後保健所の所長職を拝命しました。

保健所で取り組んだこと

着任後、保健所すべての職員と面談をして、仕事の内容と課題を教えてくださいました。先輩保健所長の先生方にも多くのご指導をいただきました。また、地域をくまなく回り、保健所の役割を肌感覚で学びながら、保健福祉行政の勉強をしました。その中で、所管する地域が恐ろしく高齢化が進んでいること、医療施設がないこと、福祉施設の取組は一定進んでいることなど、様々なことが見えてきました。そこで、医師派遣システムや救急医療ネットワークづくり、高齢者介護施設と医療施設連携、福祉施設の活性化、丹後色のある健康づくりなど、様々なことを手がける機会に恵まれました。

保健所・公衆衛生医師のやりがいと魅力

2年間の勤務でしたが、かけがえのない2年間になりました。日々、次々と新しいことがあり、ワクワクする毎日でした。保健所医師の仕事の魅力は、①非常に創造的な仕事ができる、②保健福祉事業を俯瞰して学ぶ機会が得られる、この2点につきると思います。もちろん、食中毒案件や不法投棄の行政処分等、結核をはじめとした感染症対策、精神保健事業、生活保護など必ずついて回る仕事もありますが、一方で、「ヒトとヒトを結びつける」「ネットワークを作る」など地域のために必要と思えることでお金の余りかからないことはすぐに実行できてしまいます。臨床医では得られないかけがえのない経験ができたと感じています。

現在・今後のビジョンとライフワーク

現在は、消化器内科臨床医として基幹病院に勤務しています。臨床医を目指して医師になりましたので、現状には十分満足しています。保健所医師として経験できたすべてのことは私の人生においてプラスになっています。今後は、消化管難病の診療と研究を継続し、後進の育成を目標にしています。

診療での目標に目途がついたら、もう一度、地域づくりに関わるような仕事がしたい、とも思っています。

後輩へのメッセージ

保健所医師の経験は、臨床医としてもプラスになる経験です。保健所は様々な多職種が集いチームとして仕事ができる場でもあり、医師が経験できる異文化交流にはこれ以上のものはなかなかありません。より多くの医師に、世界観が広がり深まる保健所医師を経験して欲しいと思います。

臨床経験やそれまでの信頼関係やつながりは、 地域保健でも大きな力になります。



Role Model

4

Akiko
Misawa

Profile

- 1993年 山口大学 医学部 卒業
- 1993年 京都府立医科大学附属病院 小児科 研修医
- 1995年 関係病院 小児科
- 2001年 京都府立医科大学大学院 医学研究科
内科系専攻博士課程 修了
- 2001年 関係病院 小児科
- 2004年 第一子誕生
- 2008年 第二子誕生
- 2009年 京都府山城北保健所 医務主幹
(京都府立医科大学 小児科 学内講師併任)
- 2013年 ~現職

三沢 あき子

- 京都府乙訓保健所 所長
- 京都府立医科大学 小児科 講師併任

京都府立医科大学小児科に入局後、2009年に京都府保健所勤務となるまで、16年間継続して、大学および関係病院において小児科臨床・研究に従事。大学院では、小児がんに関する研究を行い、医学博士を取得。

行政・公衆衛生分野に進んだときの理由

第二子が誕生し、臨床と子育ての両立に限界を感じたための後ろ向き理由での選択でした…。「両立できそうな保健所に一時的に」と上司に配慮いただき、医局人事で保健所へ医務主幹として勤務しました。

保健所で取り組んだこと

最初は、臨床とのギャップで「しんどいなあ…」と思った時期もありましたが、地域で大切なことが見えてきました。医療でみる姿は個人のごく一部の面にすぎず、その個人が生活していくうえで地域にはいろいろな課題があり、医療での経験があるからこそ取り組めることがたくさんありました。当時、上司であった保健所長の「やりたいことをやったらいい」という励ましもあり、保健師さんや地域の関係機関と共に、地域での在宅療養児の支援体制づくりや児童虐待未然防止の医療連携に取り組みました。

保健所・公衆衛生医師のやりがいと魅力

保健所は地域保健を担う専門機関であり、地域全体を見据えて、地域医療と連動し関係機関との信頼関係をつくることで、地域全体がうまくいくように、人材・機関をつないで動かしていく力を持つ地域機関です。

私の保健所への異動は、当初、前向きな理由ではありませんでしたが、その後、やりがいを感じ、前向きな気持ちで2009年からは保健所長となり、地域保健に取り組んでいます。

現在・今後のビジョンとライフワーク

地域全体がよくなるように、地域保健に関わる保健所、市町村、民間の地域でのプレーヤーとして活躍する人材を育成していきたいと思っています。

また、様々な課題に対しても、研究マインドも忘れずに、フィールドを持っている強みや経験を活かし、取り組み成果などをまとめて見える化し、得られた成果を地域に還元していきたいです。

後輩へのメッセージ

地域保健は地域医療と連動しており、また、しっかりした臨床経験があることにより、取り組めることが深く大きくなると実感しています。臨床から地域保健に移行しても、新たにゼロにリセットされるのではなく、それまでの臨床で培った経験、信頼関係、つながりは地域保健においても自身の基盤となり、とても大きな力になります。

また、必ずしも公衆衛生を専門としていなくて、保健所に従事しても、適宜、全国保健所長会や国立保健医療科学院などで学び、つながる機会があり、日々の実践で経験を重ね取り組みながら、キャリアアップしていくことができます。